

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370871

研究課題名(和文)17世紀イングランドにおける宗教政治と音楽の関係についての歴史研究

研究課題名(英文)Religious politics and music in seventeenth-century England

研究代表者

那須 敬(NASU, Kei)

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：40338281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：オルガンの破壊命令に代表される、1640年代のイングランド長期議会による教会音楽の統制を、近世イングランドの政治・宗教・文化の歴史的構造の中で考察した。まず16世紀からの「長い宗教改革」における音楽の位置付けについて確認し、17世紀前半に導入された典礼改革の意義を論じた。ケース・スタディとして1620年代のダラム大聖堂における論争を分析し、1640年代の議会政策への連続性を明らかにした。大聖堂改革に着手し、教区礼拝に詩篇歌を導入した議会の音楽政策の背景には、神学的対立だけでなく、教会統治に対する聖俗の権限の問題や、聴覚と感情についての当時の身体理解など、複合的な要因があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The project studied the Long Parliament's policies on church music during the 1640s and analyzed them within political, religious and cultural contexts of early modern English history. It examined the liturgical reformations in the sixteenth century as well as the new ceremonialist ideas introduced by generations of conformist theologians in the early seventeenth century. A case study of disputes over the use of organs and other musical instruments at Durham Cathedral in the 1620s has identified many of the key issues that would resurface during the 1640s. The debates involved not only different theological viewpoints but also conflicting ideas about church government, and the contemporary understanding of the relationship between human affections and the faculty of hearing.

研究分野：歴史学

キーワード：イギリス史 音楽史 文化史 宗教史 オルガン

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでの研究から、1640年代のイングランド議会、ウェストミンスター神学会議、言論界における政治・宗教秩序の再構築をめぐる議論の中で、教会音楽が繰り返し議論の対象となっていたことを確認してきた。国政においても教会制度においても前例のない変動を経験した17世紀において、なぜ議員や神学者たちは音楽のあり方に強い関心を示したのか。この問題への視座は、政治史研究に集中してきた歴史学にも、楽曲研究に集中してきた音楽史にも不十分であるという認識が、本研究課題の計画に至った背景である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、17世紀イングランドにおける、教会音楽をめぐる諸政策や論争の分析を通して、政治と宗教において音楽がもった歴史的意味と役割を明らかにすることである。チャールズ1世親政期(1630年代)から内戦・革命期(1640-50年代)は、政治的・宗教的な秩序の再構築が試みられた時代と言えるが、この過程の中に、16世紀宗教改革から続く礼拝音楽をめぐる論争を位置づけることによって、新しい視点から近世イングランド史像を描くことを目指す。作曲家や楽曲、楽器奏法などを対象としてきた従来の音楽史研究とは異なり、本研究は国政、教会制度、社会規範と音楽の有機的な関係を考察し、歴史学研究の対象に「聴覚」への視点を加える、「新しい文化史」研究の試みでもある。

研究調査は、以下の三つの観点に沿って行う。

(1) ダラム大聖堂の統治機構と典礼音楽の実践についての研究。ダラム主教、聖堂参事会、オルガニスト、聖歌隊、周辺教区を含む教会統治のネットワークにおける「アルミニウス派」宗教政策の浸透と、礼拝音楽の管理と実践の仕組みを明らかにする。またこれを批判した聖堂参事会員ピーター・スマートに関わる史料を精査し、ダラムにおける宗派対立を分析する。

(2) 内戦・革命期のイングランド議会における教会統治と音楽政策の研究。1640年以降の議会による主教の弾劾、主教制の廃止、大聖堂の閉鎖、スコットランド教会との連携等の政策決定を、礼拝音楽に対する政策との関係で調査する。議会の諮問機関であるウェストミンスター神学会議での「詩篇歌」の新規作成とこれをめぐる論争、また1643-44年の議会条例による偶像破壊とオルガン撤去の実施についても調査し、革命政治と音楽の関係についての全体像を描く。

(3) 教区教会のサウンドスケープの研究。国教会中枢部や議会政治を離れて、個別の一般教区教会における礼拝音楽の実態を、現存する教区記録を用いて調査する。また、広く教区教会に普及した韻律訳詩篇歌(metrical psalms)について、国教会や議会の教会政策

の動向と比較しながら考察する。さらに、礼拝以外の音楽やサウンドスケープ一般との関係についても、近世バラード研究の蓄積と比較しながら検討し、「聴覚の社会史」叙述を試みる。

### 3. 研究の方法

一次史料のうち手稿史料は、イギリス各地の文書館・図書館で行う。パンフレット、条例、論文、神学書等印刷史料については、EEBO(Early Modern English Books Online)をはじめとするデジタル史料データベースを活用し、国内での研究作業の効率化を図る。

「研究目的」の欄に記した三つの研究調査テーマについての調査方法は以下の通りである。

(1) ダラム大聖堂の統治機構と典礼音楽の実践についての研究：

ダラム大聖堂についてはDurham Cathedral Libraryに保存されている聖歌隊関係史料、楽譜史料、またDurham University Libraryに存在する聖堂参事会記録、ジョン・コジン書簡類や年代記類を調査する。ピーター・スマートについては、オクスフォードBodleian Library所蔵の手稿・書簡類を調査する。スマートの裁判についてはロンドンNational Archives、およびヨークBorthwick Institute for Archivesにて調査する。

(2) 内戦・革命期のイングランド議会における教会統治と音楽政策の研究：

議会史については刊行議会史料のほか、British History Onlineなどのオンラインサービスを使用する。そのほかの手稿史料では、British Libraryが所蔵する庶民院議員S. デューズ、B. ホワイトロック、L. ウィタカーらの議会日誌類を調査する。ウェストミンスター神学会議については刊行されている議事録のほか、討議内容にかかわる手稿史料をDr. William Library およびBodleian Libraryにて調査する。

(3) 教区教会のサウンドスケープの研究：

現存する教区会計簿や有力市民の日誌類から、教区教会におけるオルガンの設置・修理・撤去の状況について調査する。庶民院議員の教区教会でもあったウェストミンスターのセント・マーガレット教会が保持していたオルガンについては、Westminster Archive Centreでの調査を行う。韻律訳詩篇歌の調査にはEEBOを活用する。教区教会外のサウンドスケープについては、B. スミスやC. マーシュらによる先駆的研究を参照しながら、民衆向けパンフレット類やJ. オープリなど同時代の研究家の記録を用いて研究を進める。

### 4. 研究成果

本研究課題を通して得られた結論の一つは、1640-50年代の内戦・革命期における教会音楽をめぐる論争には、(a) テューダー朝宗教改革にはじまる長期的なコンテキスト、(b) フッカー/アンドリュース主義に代表

されるステュアート朝国教会の儀式尊重主義の興隆という中期的なコンテクスト(c) 1620年代ダラム大聖堂における典礼論争と、1640年代長期議会によるその「再発見」という、短期的なコンテクストの三つの観点から理解されるということである。

(a)においては、『共通祈禱書』を作成したトマス・クランマの典礼音楽観、カルヴァン主義の伝統、反カトリック思想が重視される。宗教改革前から継続していた、ポリフォニー音楽の是非をめぐる論争は、プロテスタント宗教改革を経て先鋭化し、典礼の簡素化が推奨された。ただしエリザベス1世の音楽保護により、大聖堂におけるオルガンと聖歌隊は維持された。いっぽうで、公式の典礼に組み込まれることのないまま、一般会衆による韻律訳「詩篇」の斉唱が教区教会レベルで流行した。したがって、16世紀の終わりまでにイングランド国教会には、きわめて様相の異なる二つの音楽的伝統、すなわち大聖堂の専門音楽家集団によるポリフォニー音楽の世界と、教区教会の会衆による無伴奏・ユニゾンの詩篇歌の世界が併存することになった。

しかし、この対立構造がそのまま革命期のオルガン破壊につながったのではない。(b) 16世紀後半から17世紀はじめにかけて、国教会中枢に近く影響力の強い一部の高位聖職者たちのなかで、説教を礼拝の中心にすえるカルヴァン主義の伝統から距離をおき、非言語的な様式や身体経験に敬虔さを追求する新しい言説が復興する。リチャード・フッカーからランスロット・アンドリュースに継承されたこの儀式尊重主義は、やがてリチャード・ニールやウィリアム・ロードなどのアルミニウス派聖職者集団によって、初期ステュアート朝国教会のサウンドスケープを変容させていく。1610年代から30年代にかけて、全国の大聖堂や大学礼拝堂が次々に着手したオルガン導入が、この新しい動きを裏付けている。

(c) ケース・スタディとして、1620年代のダラム大聖堂における教会音学改革の実体と、これを批判した聖堂参事会員ピーター・スマートの1628年の説教、これをめぐる地方・中央行政の対応を調査した。ダラム大聖堂は、アルミニウス派のダラム主教ニールと、のちに同主教となる聖堂参事会聖職者ジョン・コズンを中心に、礼拝様式の美化が進められ、典礼プログラムにおける音楽の使用においても、他に例を見ない独自の改革が進行していた。これを従来の国教会の伝統からの逸脱であると批判したスマートは、高等宗務法廷によって排除されたが、その告発は約10年後の1640年、開会直後のイングランド議会に「発見」され、政局に大きな衝撃を与えることになる。長期議会による一連の教会改革に対する、スマート事件の影響は従来の研究で見過ごされていた点であり、本研究によって、その詳細が明らかになった。

研究成果は3回の学会(講演会含む)で公

開、雑誌論文でその概要を発表した。研究成果を網羅し、17世紀イングランド革命の全体像に接続して論ずる単著の執筆を、現在継続している。また、研究の過程で得られた近世の感覚理論についての知見を応用して、共著『痛みと感情のイギリス史』を執筆した。聴覚と信仰の関係をめぐる問題は、近年議論が活発化している「感情史」にも深く関わりがあり、今後も継続して取り組む予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

那須敬、「革命期イングランドのオルガン破壊」、『思想』、査読無、第1111巻、2016年、80-101頁

〔学会発表〕(計3件)

那須敬、「Discord in the Air: Music and the Church of England in the Early Seventeenth Century」、公開シンポジウム「The Spread of the Reformation and its Trans-National Impact」、2015年6月20日、立教大学(東京都豊島区)

那須敬、「ミルトン・内戦・オルガン」、日本ミルトン協会2014年度研究大会、2014年12月6日、フェリス女学院大学(神奈川県横浜市)

那須敬、「イングランド教会音楽『暗黒の時代』」、聖マーガレット礼拝堂オルガンレクチャーコンサート、2013年5月25日、立教女学院(東京都杉並区)

〔図書〕(計2件)

(共著)伊藤剛史・後藤はる美(編)、那須敬ほか『痛みと感情のイギリス史』(「章情念 プロテスタント殉教ナラティブと身体」)、東京外国語大学出版会、2017年、106-140頁

(翻訳)ジェニー・ウァーモールド(編) 西川杉子(監訳)、那須敬ほか(訳)『オクスフォード ブリテン諸島の歴史 第17巻 17世紀 1603年-1688年』(第3章・第4章)、慶應義塾大学出版会、2015年、110-198頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

那須 敬 (NASU, Kei)  
国際基督教大学・教養学部・上級准教授  
研究者番号：40338281

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし